

幸手市郷土資料

道徳のまち

ささて

幸手市教育委員会



もくじ

幸手市の小・中学生のみなさんへ
私たちのふるさと 郷土・幸手を詠む

小学校低学年

- 1 「さっちゃん」と わになって 2
- 2 朝の通学路 4
- 3 ごんげんどうづつみくきせつの花に思いをよせて 6

小学校中学年

- 4 ひびけ 幸手わだいこ 8
- 5 絵かき教室 12
- 6 ことさんとしらさぎ 14

小学校高学年

- 7 母娘順礼 16
- 8 幸手への思いを写真にこめて 18
- 9 生活を支える水 21

中学校

- 10 志は高く、望みは大きく 24
- 11 箱根路を走る―柳 利幸― 27
- 12 幸手・ブランド米 30
- 13 石に刻まれた心 33

- 道徳の窓①（郷土の偉人） 11
- 道徳の窓②（郷土の旧跡・文化財・芸能） 36

協力者・編集委員

幸手市の小・中学生のみなさんへ

幸手市教育委員会教育長

山西 実

どこまでも続く、緑豊かな大地。四季折々の花が咲く権現堂堤。今なお息づく宿場町としての歴史。そして、人々によって受け継がれてきた暮らしや伝統行事。私たちの住むまち幸手市は、このように人と自然や歴史、産業や文化などが調和した豊かなまちです。

そこには、幸手を愛し、誇りをもって郷土を豊かにしてきた多くの人々の思いがあります。そして、現在も多くの人が活躍したり、私たちを支えてくれたりしています。その人たちの考え方や感じ方は、私たちの心に響き、これからの生き方の指針となるものがあります。

この郷土資料『道徳のまち さつて』は、先人の生き方、民話、そして、現在活躍している人などを題材にして皆さんが考えやすい資料となるよう作成しました。これらの資料を道徳の時間等で活用することにより、人間の生き方や考え方を学びとることができると考えます。また、身近な出来事や先人の生き方に触れることにより郷土幸手への誇りと愛着をもつこともできると思います。

道徳のまち、幸手市にはこの資料集には紹介できないほど、他にもすばらしい逸話があります。家庭で話し合ったり、地域でヒントになるものを見つけたたりしてみましよう。

私たちのふるさと

東には筑波山、北には日光の男体山、那須の連山が控え、浅間の火山の煙が東北に流れていく。いつそう大きく見えたのが、往還沿いにそびえるように立っていた榛の並木だった。

稲の取り入れの時になると、この樹を軸にして稲藁の束が積み重ねられ、樹吊るしが作られていく。その風景は圧巻だった。

(元アメリカ日産自動車社長・片山豊氏が幸手で小学校時代を過ごした当時の幸手の風景です。)

郷土・幸手を詠む

霧晴れ来 権現堂堤 巡礼碑
梅落ちて 今日守部の忌 歌欲しや
早春を 先ずお針娘の 頬に感ず

(中野三允の俳句から)

「さっちゃん」とわになつて

きょうは、たのしみにしてきたさつてのしみんまつりです。えきまえどおりは、*でみせがでて、パレードをみる人でいっぱいです。さつてしのキャラクター「さっちゃん」もくるそうです。

わたしは、なかよしのまきちゃんとなつみちゃんと、しみんまつりにいくやくそくをしていました。でも、おととい、わたしとまきちゃんは、なつみちゃんがかかりのしごとをわすれたことをちゅういして、口げんかとなつてしまいました。

それで、なつみちゃんをさそわずに二人^{ふたり}だけで、おまつりにきたのでした。

しかし、わたあめのおみせをみても、きんぎょすくいをみても、すこしもたのしくありません。まきちゃんを見ると、やっぱりげんきがありません。わたしは、「ねえ、このさきに『さっちゃん』がいるそうだよ。みにいこうよ。」

といって、かどをまがりました。「さっちゃん」のまわりには、大ぜい^{おほ}の人がいました。そして、そのちかくで、なつみちゃんが一人^{ひとり}でまわりをみまわっていました。

(だれかほかの人をまっているのかなあ。それとも、わたしたちを……。)
わたしは、まきちゃんに、

「なつみちゃんがいるよ。さそおうよ。」

といました。すると、まきちゃんは、





「……だけど、なつみちゃん、まだあやまってくれないもん……。」

と、口げんかのことをすこしきになっているようです。わたしたち二人は、だまって、なつみちゃんのうしろをそっとおとりすぎました。わたしはなつみちゃんのことかきになってふりかえると、まきちゃんもふりかえっていました。

すこしいくと、「さっちゃん」がいました。「さっちゃん」は、みんなをえがおにするキャラクターとしてにんきものです。きょうも、「さっちゃん」のまわりは、子どもたちのわができていました。わたしとまきちゃんも、そのわの中にはいました。

「さっちゃん」は、一人一人にあくしゆをしていましたが、やがて、だれかをたまねきしてよびました。うしろをふりむくと、

なんと、なつみちゃんがちかづいてきました。「さっちゃん」は、すこしはなれたところで一人ぼっちでいるなつみちゃんにきがついて、たまねきしたのでした。なつみちゃんは、わたしとまきちゃんにはずかしそうにちかづくくと、

「このまえは、かかりのしごとをわすれちゃってごめんね。」

といいました。わたしとまきちゃんは、

「いいんだよ。こっちこそ、いいすぎてごめんね。」

そういって、なつみちゃんの手をとり、わの中にはいりました。

なつみちゃんもまきちゃんも、うれしそうです。

(やっぱり、みんないっしょがいいね。)

わたしは、こころがふわっとしてきました。わたしたち三人は、「さっちゃん」や子どもたちとつないだ手をいつまでもはなしませんでした。

*でみせ…おまつりのときなどに、とおりにならぶおみせ

●ともだちとなかよくして、たのしかったことやうれしかったことをかきましよう。

朝あさの通学路つうがくろ

「ゆうたくん、きょうのひる休みやすみにドッジボールしようよ。」
朝あさ、通学つうがくはんでならんで歩いていたら、おなじクラスのけんちゃんけんちゃんがよこにきて、話はなしかけてきました。

「ドッジボールはおもしろいよね。みんなもさそおうよ。」
ぼくたちは、朝あさの通学路つうがくろを二人ふたりでむちゆうちゆうになってならんで話はなしながら、歩あるいていま

すると、後うしろを歩あるいていたスクールガードスクールガードリー

ダーダーの田中たなかさんに、

「一いちれつれつにならぼうね。おしゃべりしてしゃべりしてるからき
みたちだけおおくれてるよ。」

と、ちゆういちゆういされてされてしまいました。

(けんちゃんけんちゃんとなかよくはなしてはなしていただけなのに、ちゆういちゆういされるなんて……)

つぎの日ひの朝あさ、通学つうがくはんのしゆうしゆうごうごうばしばしよよに行いくと、田中たなかさんはきょうもみんなよ
り早くはやきていて、はたをはたをふって

「ゆうたくん、おはよう。」

とあいさつをしてしてくれました。でも、ぼくは、きのうのきのうのことを思おもい出だして、だまっだまってい
ました。

「気きをつけて、歩あるきましょう。」

田中たなかさんの声こえで、いつものように一いちれつれつにならんで歩あるきはじめました。ぼくは、田中たなか
さんと目めをあわせるのがいやで、ずずっと下したをしたをした歩いて歩いていました。



学がくしゅうした日ひ

月がつ

日にち

するととつぜん、

「あぶない。」

と声こえがして、ぼくの体からだがいきなりよこにひっぱられました。そして、そのとなりを一台いちだいのトラックがスピードをあげながら通りとどすぎていきました。ずっと下をむいて歩いていたので、近づちかいてくるトラックに気がつかなくなったのです。

「けがは、なかったかい。」

ぼくの体をひっぱってくれた田中さんは、心配しんぱいそうにいいました。

「よこにひろがったり、くるまにちゅういして歩かないとあぶないよ。」

田中さんにはっこりして、また、みんなと歩きは始めています。

ぼくは、田中さんのうしろすがたを

見みながら、かんがえました。スクール

ガードリーダーのみなさんは、ぼくが

入学にゅうがくしたときから毎日まいにち、通学路つうがくじをいっ

しよに歩いてくれたり、交差点こうさてんに立たっ

て見守みまもってくれたりしています。

(それなのにぼくは……。)

つぎの朝、しゅうごうばしよに行く

と、田中さんはまた一ばん早はやく来て、

ぼくたちを待まっています。ぼくは大き

な声で、

「田中さん、おはようございます。」

といいました。

朝あさひ日がきらきらとかがやいて見えま

した。

● 日ひごろみぢかでお世話になっ
ている人ひとへつたえたいことを書かき
ましょう。



ごんげんどうづつみ　くきせつの花に思いをよせてく

学しゅうした日

月

日



わたしは、きよ年の春に東京から幸手に引っこして来ました。

(友だちとなかよくできるかな。まわりはどんなところかな。)

はじめての引っこしに少しドキドキしていました。わたしの家のすぐ近くには、ごんげんどうづつみがあります。ちょうどさくらがまんかいでした。引っこしをおえたわたしは、さっそくつつみにあがってみました。つつみの向こうがわには、黄色いなの花もいちめにさいています。さくらの花びらがひらひらと風にまっつて、まるでさくらのトンネルを歩いているようです。わたしは、だんだんやさしい気もちにつつまれました。あたらしい生活へのふあ人もわすれてしまいました。

わたしは、ごんげんどうづつみにときどきさんぽに出かけることにしました。

雨のきせつになりました。むらさきや青、白、うすいピンク……。あじさいの花がさきはじめました。色とりどりの花が、雨ふりでつまらなそうにしていたわたしに、「元氣を出して。」と話しかけてくれてるようです。小さな花がよりあつまつてさいているあじさいの花を見ると、わたしのこころは、いっしゅんで明るくなりました。

あつい夏がおわり、さわやかな秋の風がふきはじめました。土手いちめにまつ赤な花がさいています。ひがん花です。べつの名前では、「まんじゅしゃげ」ともいいます。どこまでもつづくまっ赤な花……。しばらく見ていたら、わたしのこころの中にやる気がわいてき





ました。ふと気がつくくと、わたしのかたに、赤とんぼがとまっていたいました。赤とんぼは、すみわたる空にすっととんでいきました。その先には、まっ青な空が広がっていました。

さむい冬がやってきました。幸手にも雪がふり、ごんげんどうづつみは、雪げしようとなりました。さくらの花のころのにぎわいもなく、あたりはしずまりかえり、シーンとしています。

数日たって、つつみに行ってみると、水せんの花がさいています。北風の中で、

「がんばって。がんばって。」と言ってくれているようです。

を見て、わたしは、ゆう氣をもらいました。

寒さにもまけないで、いっしょうけんめいにさく水せんの花



引っこしをして、一年。ごんげんどうづつみは、いろいろなことを教えてくれました。そして、この自ぜんは地いきのほぞん会の方がたがそだててくれているということも知り、うれしくなりました。わたしは、ごんげんどうづつみが大きくなりなりました。

● みぢかな自ぜんを見て、いいな、すごいな、と思ったことには、どんなことがありますか。

ひびけ 幸手和だいこ

がくしゅう
学習した日

月 日

ドンツ、ドンツ。

小学三年生になったばかりのたかしくんは、たいこのうち方教室にさんかしていました。たいこをうつと大きな音が耳に入り、手からはビリリとしたしんどうが体につたわります。とてもいい心地がしました。その帰り、「もっとじょうずにやりたい。」そう決心して、たかしくんは幸手和だいこほぞん会に入ることになりました。それからというもの、土曜日と日曜日は毎週たいこのれんしゅうにうちこみました。

「たかしくん、リズムがずれているよ。」

八月になり、今日もたいこのれんしゅう中です。ギュツとばかりをにぎり、みんなに合わせるようにドンツとたいこをたたいたのですが、みんなと合いません。

(はあ。またかあ……。)

何回もちゅういされているのに、なかなかうまくできない自分にイライラがたまり、

(なんでぼくだけできないの。もうたいこなんか見たくない。)

たかしくんはなみだがこぼれそうになりました。

その時、

「今年、入会した子はあつまって。」

という声が聞こえました。その声は幸手和だいこほぞん会をつくった会長の栗原先生の声でした。みんなをあつめると、





先生は去年行われた東日本大会につながる県大会「創作和だいこ大会」のビデオを見せてくれました。この大会で幸手和だいこほぞん会はゆうしようしたのです。かたまでふりあげている手。しんけんまなざし。こきゆうを合わせようとしている気もち。すべてが生き生きしていました。

「あんなふうになりたいね。」

となりで見ていた友だちがたかしくんに話しかけました。

(たしかに、あんなにじょうずにできたらいいな。でも……。)

たかしくんは、だまっただまま、じっとビデオを見つづけていました。

ビデオを見おわると栗原先生が話し出しました。

「今、見てもらったように、幸手和だいこは、今、幸手市をだいひょうするげいのうといえるくらいになったんだ。でもね、さいしょからすべてがうまくいったわけではないんだよ。」

(え……。)

たかしくんはおどろきました。

「幸手和だいこほぞん会ができたのは、だいたい二十五年前のことなんだ。まつりでたいこのたたき手がいなくなったのをきっかけに、幸手にすんでいる自分たちでたいこのげいのうを作り上げていこうとなったんだ。でも、さいしょのれんしゅうばしはぼう音しせつのないところだったから、近所にめいわくをかけないように一けん一けんおねがいしてれんしゅうをさせてもらっていたんだよ。たいこの数もないので車のタイヤや竹をよこにしてれんしゅうをしていたんだ。」



「そんなに大へんだったのに……なぜ、二十五年間も。」

思わず、たかしくんが聞くと、

「そうだね、やめようと思ったときもあったよ。だけどね……和だいのよさをみんなにつたえたくて、きょう土幸手のほこれるげいのうをつくろうと思ってつづけてこられたんだ。」

たかしくんはグツとせなかをおされた気がしました。

「このえんそうを聞いて、ひがしにほんだいしんさい東日本大震災のひさい地の人やびょう気の子も元気になってくれたことがあったよ。そうやって和だいのよさをつたえていく

ことを、きみたちにも引きついでほしいし、幸手に長くつづくげいのうとしてのこしてほしいんだ。」

(そうか……。)

たかしくんは、そんなふうに話す栗原先生が一だんと大きく見えました。

栗原先生は話しおえると、「さあ、れんしゅうさいかい。」とよびかけました。たかしくんはいそいで立ち上がりました。そして、カいっぱいうでをふり上げました。

● 自分の目標やめあてに向かっているばってよかったな、と思ったときの気持ちを書いてみましょう。

★ 幸手には他にどんなきょう土げいのうがあるのでしょうか。それをささえる人たちの思いも調べてみましょう。

道徳の窓①

郷土の偉人



雷権太夫（力士）

江戸時代、力士が幸手から誕生しました。最高位は幕下六枚目という番付で、十三年にわたり、相撲年寄筆頭として角界で絶大な勢力を揮ったそうです。

また、権現堂村では雷権太夫が勧進元となり、七日間にわたり四百人以上の力士が集まり相撲興行が開かれた記録があります。

一色直朝（武人・画家・歌人）

戦国時代から安土桃山時代にかけての武将。古河公方足利家の重臣であり、幸手城主。直朝は古河公方の重臣として活躍したばかりではなく、画家や歌人としてもすぐれた業績を残した教養人であり、文人武将として戦国時代における異色の存在でした。

画家としては、『伝貞巖和尚像』や『白鷹図』等、歌人としては『桂林集』という作品があります。また、著作として随筆『月庵醉醒記』があります。

伯元・察元・烈元（棋士）

江戸時代、囲碁の最高権威者に与えられた碁所になることができた四家の筆頭、本因坊家の人。安土桃山時代の一世算砂から二十一世秀哉まで継承されました。

第八世「伯元」は天神島、第九世「察元」は平須賀、第十世「烈元」は上吉羽の出生で、幸手から三代続けて本因坊が輩出されています。

平成十五年三月「察元」の墓石が発見され、その後も、「伯元」、「烈元」の墓石が続けて確認されたことをきっかけに、幸手市教育委員会では、平成十九年度に市内各小学校での学校囲碁指導員による囲碁クラブの立ち上げをいたしました。

また、その年の十一月、幸手市文化祭事業の一環として『子ども囲碁大会』を開催するようになりました。囲碁文化は幸手市の誇るべき地域資源です。

後上辰雄（文化人）

大正六年に『幸手町誌』を自ら調査、執筆、編集を行い、幸手町の発展向上に資したい熱意から自費出版しました。その後、武者小路実篤が創設した「新しき村」に参加しました。

岡田惣右衛門（剣術家）

日本の古武道の流派の一つで、すねに打ち込むことを特徴とし、川辺の柳の枝が強い風で川面を打っていることから名付けられた柳剛流。

惣新田に生まれた岡田惣右衛門寄良は、心形刀流を基盤に数々の技法を加えてこの柳剛流を開き、幕末には多くの門人を有していました。

鈴木百淵（心学者）

上高野に住み、元々医業にあたっていましたが、父母の死をきっかけに行者となりました。約二十年かけて書き写した大般若経六百巻は、今でも祥安寺に残されています。

また、心学者として『幼童便蒙』『元原本尋』などの著作を残している他、寺子屋を開設し、地域教育を支えました。

中野三允（俳人）

幸手町の薬局に生まれ、東大病院薬局に勤務。明治二十九年ごろ、正岡子規の直弟子となり、同三十二年に早稲田俳句会を設立。同三十五年には埼玉県最初の俳誌『アラレ』を創刊しました。その後も幸手の俳句会「若草吟社」の選者として、地元の俳句の発展にも尽力しました。



ぼくの通う小学校では、夏休みに絵かき教室が開かれる。そこで、夏休みの宿題のポスターの書き方を教えてくれるのだ。くばられたあん内の手紙を見ていると、クラスメイトのゆうやが声をかけてきた。

「まさと、夏休みの絵かき教室、いっしょに行こうぜ。」

手紙を見ると、茅兵先生ぼっぺいという中国の方がポスターのかき方を教えてくださるそうだ。絵が苦手なぼくにとってはありがたい話だけど、ぼくは中国語を話せないし、外国の人と話したことすらないから、ちよつとふ安だった。

(どうしよう……。ポスターのかき方は教えてもらいたいけれど……。)

まよっているうちに、ゆうやから、

「じゃあ、いいな、まさと。明日、学校でね。」

と言われてしまったので、ぼくは、

「……うん。」

と、はつきりしない声で返事をしてしまった。

次の日、ぼくはしぶしぶ絵かき教室へ出かけたが、学校に行くまでの足どりは重かった。教室に

着くと、ぼくは部屋のすみのほうで絵の具を広げ、あい鳥週間の絵をかき始めた。空に向かっていると、いなく鳥をかこうとしているのだが、ちつともうまくかけない。バランスが悪い。そんな時、茅兵先生がやってきて、

「すごい。まるで今にもとんで行きそうな鳥だね。」

と、にこにこしながらほめてくれた。ぼくは思ってもいなかった先生の言葉におどろいた。どう見ても上手な絵に見えるわけがない。茅兵先生はつづけて言った。





「羽が大きくかかれています、今にもとんで行きそうですよ。これはあなたにしかかけない絵ですね。」
そう言われると、この絵がちよっとすてきな絵に見えてきた。ぼくは、なんだか自しんがわいてきて、お中になって絵をかきつづけた。気がつくとき、ぼくは自分でもびっくりするくらい力強い鳥をかき上げることができた。ふと、教室の後ろを見ると、たくさんの鳥の絵がかざられているのが目についた。どの絵の鳥もみんな気持ちよさそうにとんでいる。ふしぎなことに、このたくさんの絵が、前にどこかで見たことがあるような気がした。はじめて見る絵のはずなのに。
(なんだか見おぼえがあるなあ。どうしてなんだろう。)
じっと考えていると、茅兵先生がとりにやって来た。

「見たことがあるでしょう。全部、幸手にいる鳥だよ。」

ぼくはおどろいた。どれも茅兵先生がかいた絵で、しかもみんな幸手の絵だったなんて。茅兵先生は他の絵も出して見せてくれた。幸手市を流れる中川や、けん央道、ごんげんどうの自ぜんの風けい、どれも見たことのあるけしきだった。

「わたしは、日本の大学で絵の勉強をしてから、ずっと日本でくらしています。今は、幸手の美しさをみんなに知ってもらいたくて、幸手の風けいをかいています。日本はずばらしいですよ。ほかの国にはないけしきがたくさんあります。」

ぼくは、茅兵先生が幸手の美しさを幸手に住むぼくたちよりもくわしく知っていて、大切に思っていることをふしぎに思った。

帰り道、ぼくはゆうやといっしょに、読書感想文の本をかりるために、市立図書館へ向かった。本をさがしていると、世界の国々がしよいかいされてる本が目についた。その本にはいろいろな国の食べ物や生活などがしよいかいされている。茅兵先生が日本や幸手のことをくわしく知っていたように、ぼくも外国のことを知ってみたいと思った。ぼくはその本を手に取り、お中になって読み始めた。

● 日本や外国のよさ、すばらしさにはどのようなものがあるか調べてみましょう。

ことさんとしらさぎ

がくしゅう
学習した日

月 日



昔、ある農家に、ことさんというむすめさんがいました。その働きぶりと心のやさしさは、村の中でも大変ひょうばんでした。ことさんの家のうら山には、広い竹林がありました。春になると、南の方から白くて美しい鳥がとんで来て、その竹林に巣を作ります。「しらさぎ」という鳥です。

ある夏のあらしの後のことでした。ことさんがうら山に行ってみると、たくさんのしらさぎの赤ちゃんたちが、巣から落ちて死んでしまっていました。

(かわいそうに。)

あたりを見回してみると、たった一羽、かすかに動いているしらさぎの赤ちゃんがいるのに気がつきました。どうやら巣から落ちて足をけがしてしまったようです。ことさんは、

その子さぎをそっと両手でだきあげて、

(きつとなおしてあげるわ。わたしが。)

とおおずりをしました。

それから毎日毎日、暑い日でもことさんは、畑仕事のあと、子さぎのエサとなるどじょうやたにしを田んぼからとってきて、その子さぎに食べさせました。子さぎは少しずつよくなり、立ち上がって歩けるようになりました。しかし、なかなか飛べるようにはなりません。

やがて、ことさんは美しいむすめに成長し、十七さいでおよめにいくことが決まりました。ただ、ことさんは、まだ飛ぶことのできない子さぎのことが気がかりではありません。(わたしが、もし、この家を出て行ってしまったら、あの子さぎは……。できることならいっしょに連れて行きたい。)





ところが、そんなことさんのもとへ、次第にこんなうわさが聞こえ始めました。

「鳥といっしょによめにいくなんて、聞いたことがない。」

「よめ入りの話だって、なくなるかもしれないぞ。」

ことさんは、子さぎを見つめながら、考えこんでしまいました。

いよいよ、よめ入りの日になり、ことさんのうでの中には、ある大きな白いものがだきかかえられていました。あの子さぎです。まっ白の花よめいしように、白い子さぎをだいて歩くことさんのすがたは、大変美しいものでした。村の人たちも思わず見られてしまい、だれ一人としてわる口を言う人はいませんでした。

ことさんのおかげで、子さぎはすっかり元気になりました。畑仕事をする時も、休けいをする時も、子さぎは、ことさんの後ろについておともをしました。そのすがたは、まるで家族のようでした。

やがて、夏もすぎ、秋になりました。秋空をしらさぎのむれが少しずつ南の方へ帰りはじめます。そんなしらさぎのむれを見つめながら、ことさんは子さぎのこれからのことを考えるようになりました。

(いつまでもいっしょにいたい。だけど……。)

今までの楽しかった日々を思い返すと、ことさんはむねが
いっばいになりました。どれくらい時間がたったでしょうか。
ことさんは、子さぎに目をやり、やさしく語りかけました。

「さあ、お行き。」

子さぎは、おそろおそろ羽を広げ、ゆっくり、ゆっくりと
しらさぎのむれに向かっ飛んでいきました。子さぎを見送
ることさんのえがおにはなみだがあふれていました。

次の年の春、ことさんの家にしらさぎのむれがやってきま
した。そのよく年も、それからことさんの家には、いつまで
もいつまでも、しらさぎのむれがおとずれたのでした。

● ことさんはどうして大事にして
いたしらさぎを見送ったので
しょうか。



「さあ、そろそろ行くか。」

今日は、あたたかな春の日。そして、大好きな母と二人で権現堂堤の桜を見に行く日。わたしたちは手をつないで出かけた。権現堂堤は、今年も桜を見に来ている大ぜいの人たちでにぎわっている。桜が満開にさくころ、母と私のこう例となったお花見はわたしの春の楽しみである。

そして、桜のほのかなかおりをのせた風を感じながら、〈順礼の碑〉の前で母が語ってくれるあの話も、わたしの心の中に残っている……。それは、昔から語りつがれている母娘順礼の物語。

昔、権現堂川は、あばれ川としておそれられていました。その川を守る権現堂堤は江戸を守る大切な堤でした。堤がきれいと江戸の町が水に沈むといわれたほどでした。

享和二年（一八〇二年）六月、長雨が続き、とうとう堤がきれ、何度しゅう理しても大雨がふりだすと、すぐにまたきれてしまうというありさまでした。きれ口は、どんどん広がりに四百メートルもの長さになってしまい、近くの村人たちまでが堤をきずく工事にかりたてられることになりました。ふり続く雨と流れるだく流は、人々の願いや努力をあざ笑うかのようで、土手の修復はうまく進みません。

その日も村人は、堤奉行の指図にしたがってくい打ちをしています。毎日続く、むずかしい工事にみなつかれきって、もう口をきく元気さえありませんでした。この日も間もなくくれようとするころ、堤の上を母親と娘の順礼が通りかかりました。「みなさん、本当にごくろうさまです。」

母親は、工事をしている人にやさしく言葉をかけ、堤のきれ口をしばらくのぞきこんでいましたが、

「このようにたびたび堤がきれなのは、龍神のたたりかもしれない。人ひとりか人身御供（神のいかりをしずめるために人間を神にそなえること）にならなければ、この堤をきずくことはできません。」

と、つぶやくように言いました。これを聞いた堤奉行は、

「だれか人柱に立つ者はおらんか。」

と、大声で村人に呼びかけました。しかし、村人は互いに顔と顔を見合わすだけで、だれも声を出しませんでした。強く降りしきる雨音とゴウゴウと流れるだく流の音だけが、夕ぐれの中にひびいていました。だく流は、村を飲みつくすように流れています。静かな時間は、どのくらいたったでしょうか。

しばらくして、母親は、堤奉行に申し出ました。

「よろしゅうございます。わたしがその人柱になってみなさんをお救いいたしましょう。」
そういうと、母親は、念仏ねんぶつをとなえたあと、あつという間にうずまく流れの中に飛びこみました。そして、これを見た娘も母のあとを追ってたちまち流れの中に消えてい

きました。いっしゅんの出来事です。

すると、不思議なことにもみるみるうちに水がひいていきました。

それからはあのおずかしかかった工事も順調に進み、堤をきずくことができたのです。

それからのち、この母娘の順礼を供養し、この出来事を後世の人に伝えようと堤の上に〈順礼の碑〉が建てられたのです。

晴れ晴れとした青空のもと、今日も大ぜいの人々が桜を楽しんでいる権現堂堤。〈順礼の碑〉のそばをときおりふく風が桜の花びらをのせて通りすぎっていきます。



● この話をとおして、心に残ったことや大切にしたいことを書いてみましょう。

幸手への思いを写真にこめて

明里は親友のさくらと教室に向かいながら、終わったばかりのひ難訓練について話していた。

「今年のひ難訓練もしっかりできてよかったね。」

「そうだね。でも、最近ひがしにほんだいしんさいは東日本大震災や常総市じょうそうしでおこった水害のような災害が多くて心配だね。」

さくらの話に明里は大きくうなずきながら、校長室の前の「幸手の歴史」と書かれたコーナーに目を止めた。

「ねえ、さくら。この写真も道路が水でいっぱいになっているよ。」

「本当だ。『幸手の歴史』って書かれているけど、いつごろの写真なんだろう。」

そのコーナーには、白黒写真が並ぶ。明里は一枚一枚を見ていく。お祭りを楽しむ人々のカラー写真もある。写真の中には、昔の町の様子うらが映し出されていた。

（私は幸手に生まれ育ってきたのに何も知らなかったな……。）

昔の道路や家並みなみなど、明里は興味深く見入った。ふと、明里はあることに気づいた。

「この写真、みんな『はまだどくいち浜田得一さん』がさつえいしているよ。」

「本当だ。この写真も……。」

先生にたずねると、幸手市の民具資料館にもっとたくさんたくさんの写真



学習した日

月
日



が飾られていることを教えてくださった。もしかしたら、幸手の昔を知るチャンスかもしれない、と明里は思った。

次の土曜日、明里はさくららをさそって、お母さんと三人で幸手市民具資料館を訪れた。資料館には、浜田さんのさつえいした写真が展示されていた。浜田さんは上高野に生まれ、幸手の人々の暮らしだけでなく、川や橋、道など、大正から昭和にかけて多くの写真を残していることが分かった。明里は「災害の記憶」という写真コーナーで足を止めた。幸手をおそった大正十二年関東大震災、昭和二十二年カスリーン台風による大水害。いずれも九月に起こった災害だ。

「道が川のように水でいっぱいだ……。」

「建物や電信柱もたおれて、みんな大変そう。」

（浜田さんは二つの大災害を体験して、自分も周りの人も大変なのに写真に残して何を伝えたかったのだろう——。）

かざられている写真を見てみると、職員の方がさらに浜田さんのとった写真をまとめたアルバムを見せてくださった。明里はたくさんさんの写真を見つめていると、一枚の写真が目飛び込んできた。

「あっ。学校で見たお祭りの写真だ。大水害から五年後だったなんて。」

「町の人々が力を合わせて、ここまで復興したんだね。」
大水害のあとは見られず、明里もさくらも自然と笑顔になる。



復興を喜ぶ人々の姿に力強さを感じた。

「浜田さんは幸手の写真をとり続けることで人々に感謝され
たんだよ。そのことに喜びを感じていたんだね。」

職員の方の言葉に明里もさくらも大きくうなずいた。

（今の幸手があるのは人々が支え合ってきたからなんだ。そのことを教えてくれた浜田さんの写真をいつまでも大切に
していかなくては——。）

明里は写真を通して、浜田さんの幸手への思いが心の中で
生き続けていく気がした。そして、もっともっと幸手のこと
を調べてみたいと思った。

● あなたが大切にしていきたい幸手のよいところを書いてみま
しょう。

● 身近なところで地域ちいきの方が協力したり、支え合っているもの
にはどんなものがありますか。



今から四〇〇年ほど前の江戸時代の話である。武蔵国（現在の埼玉
 県、東京都、神奈川県の一部）を中心に、河川の改修工事をして新田
 開発に力を注いだ伊奈氏という一族がいた。

三代目・忠克もまた祖父や父の仕事をつぎ、*関東郡代として関東地
 方を治めており、特に、河川の改修工事や新田開発に努めてきた。忠
 克は、

（わたしも、祖父や父のようにみんなのために役に立ちたい。）
 と、すぐれた土木技術をもって、米作りには欠かせない用水の整備を
 進めていく伊奈一族の仕事をほこらしく思っていた。

当時、幸手の村々は、大雨がふるたびにいつも洪水になやまされて
 いた。その一方、雨が少ないと田の水が不足して米作りができなかつ
 た。用水が十分に整備されていなかったからである。

「今年も米が作れなかった。」

「水さえあれば、田畑も開こんでできるのだが……。」

忠克は、こうした村人たちの様子を見て、

（よし、何としてでも、村の人たちの役に立ちたい。いっしょに土地
 を豊かにしてみせる。）

と用水の整備を決意した。

学習した日

月 日



忠克は利根川から水を取り入れ、大量の水をため、その水を用水路から確実に田に送ろうとさっそく計画を立てた。琵琶溜井開発のはじまりである。計画をもとに、村人たちは焼けるような夏の日も、身がこおるような冬の日も、朝から晩まで水路をほる作業を続けた。

しかし、水をせきとめることは簡単なことではない。沼地でどろが多いために土が流されやすく、何度も何度も修復をくり返さなければならなかった。

(水がなかなかとめられないぞ。うむむ……。)

その後も大雨がふると洪水が発生し、そのたびに工事を中断しなければならなかった。また、水の流れが計画したとおりに流れず、何度も何度も工事をやり直さなければならなかった。忠克は多くの村人たちに計画の見直しの同意や作業を続けるための協力をさらによびかけた。みんなで力を合わせてやれば必ず成功する、そうすれば新田が開発され生活がうるおうということを、忠克は村人たちに説得してまわったが、村人の中には、「用水はいつでもできるんだ。もうへとへとだよ。」「うちの田には、いつになったら水が来るのか。」と言って工事への不満をもらす者も出はじめた。

それでも、忠克はあきらめなかった。
(今までにない難しい工事だ。だが、なんとしても村の人たちのためにやりとげなければ……。)

忠克は、代々受けつがれてきた技術はもちろんのこと、水害から人々を守り、さらに豊かな土地にしようと労をおしまなかつ



現在の琵琶溜井の様子

た。そんな忠克の思いにつき動かされ、村人たちも工事を投げ出すことなく、琵琶溜井の開発に力をつくすようになった。

万治三年（一六六〇年）、忠克の熱い思いと村人たちの努力により、琵琶溜井はようやく完成した。

「これで私たちの田もうるおいます。」

「すみずみまで水が流れるようになって、さらに米が作れるようになるぞ。」

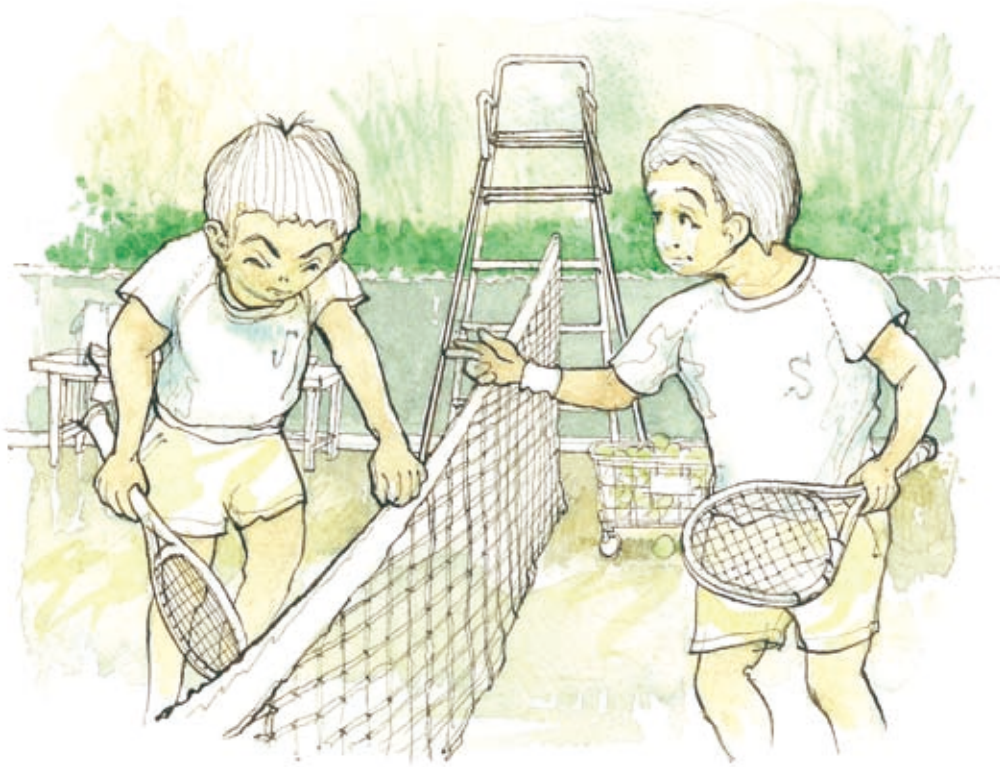
この琵琶溜井が開発されたことで、幸手の村々の水田はうるおい、米の生産量も増え、村人たちは大いに喜んだ。幸手には新たな田畑や村々が生まれた。

忠克は、祖父の時代から続いていた利根川の流れを変える工事や川沿いに堤防を作る工事に力を注いだり、父の事業を受け継ぎ利根川を整備して、船が行き来できるようにしたりする工事もした。その業績がたたえられ、埼玉県の伊奈町や茨城県の伊奈町（現在のつくばみらい市）は、いずれも伊奈氏が地名の由来となった。江戸時代初期から忠克が整備した琵琶溜井の水は、幸手だけではなく他の市や町で今でも利用されている。村人たちや後の世代のために働いたという忠克の思いと人々の協力する姿は、今も生きています。

*関東郡代：江戸幕府の職名。関東地方の幕府領を治める地方

官。伊奈氏が代々受けついだ。

あなたが地域や社会のためにできることを書いてみましょう。



「はあ。」

所属するテニス部で、ペアを組んでいる豊から、

「練習試合までの二週間、ふたりで毎日、朝練をしよう。」

というさそいを受けたとき、孝之はとっさに大きなため息をついてしまった。テニス部は、顧問の赤塚先生にたのんで、自主的に朝練ができることになっている。県大会出場を目標にしている豊にとっては、練習試合といえどもおろそかにできないということらしい。放課後の部活動の練習も最近ハードになってきて、帰宅後夕飯を食べて宿題を済ませると、かなり時間が経ってしまう毎日だ。こんなに練習していても県大会出場は難しいのが現実である。そう考えると朝練が面倒になってしまいう自分もいたが、やる気に満ちた豊の表情を見て、思わずうなずいてしまった。これからの毎日を考えて、孝之はもう一度大きなため息をつかずにはいられなかった。

朝練が始まってからの三日間は、順調だった。しかし、四日目にねぼうをしてしまい、朝練に遅刻してしまった。

(昨夜は、ちょっと夜ふかししちゃったな。)

同級生とのメールのやりとりで夢中になって、孝之が寝たのは、夜の十二時をまわってからだった。

(豊、待っているだろうな。)

思わず、真剣に練習する豊の顔が頭をよぎる。孝之は学校までの道のりを

学習した日

月 日

全力で走った。

学校に着いたとたん、一人で練習していた豊に、

「孝之、遅いじゃないか。あと少しで試合なんだぞ。気持ちがたるんでるぞ。」と大声で言われた。むっとした孝之は、

「なんだよ。たかが練習試合じゃないか。それに練習試合に勝ったって、県大会にいけるわけでもないだろ。」と思わず言い返した。豊は、何か言いたそうに口を開きかけたが、何も言わず背を向けてしまった。そんなこともあって、豊とは何となくぎくしゃくしてしまい、孝之はその後、練習に参加しても集中できず、全く身が入らなくなってしまうた。

試合当日。孝之は、今までにないほど緊きんちようし、体が思うように動かなかった。いつもはミスしないサーブもうまくいかなかった。応援してくれるチームメイトの「ドンマイ。」という声を聞くたび、気持ちがあせるのが分かる。同じコート内にいる豊の視線も気になる。自分の思う方向にボールを飛ばそうとしても、コントロールが効かない。頭の中が真っ白になってしまった。結局、今まで負けたことのない相手にも、惨敗さんぱいした。

試合に負けたショックで、孝之はだれの顔もまともに見ることができなかった。今日の試合のことを思い出すと、自然と涙があふれてきて、目の前の景色がぼやけて見えた。

「孝之、少し、ふたりで話そうか。」

ベンチでうなだれている孝之をみて、赤塚先生が声をかけてくれた。グラウンドは夕日を浴びて、オレンジ色に光っていた。

「幸手中、西中、幸手桜高校の校章に『たちばな』があしらわれているのを、孝之も知っているかな。昔、天保てんぽうの国学こくがく四大しやうだい人と称しょうされた橘守部たちばなもりべという国学者が、幸手桜高校のあたりに住んでいて、たくさんのお書物をのこし、多くの門人を育てたので、校章の『たちばな』はその偉業いぎやうを称たたえたものなんだよ。その人の書いた『待問雑記』という書物のなかに、こんな一節があるんだ。『道を歩行あゆくに、江戸までと心ざせば、千住せんじゆにて足疲れ、越谷こしがやまでと心ざせば、大澤おおさわにてあしつかれ、粕壁かすかへまでと心ざせば、杉戸すぎとに



右から幸手中、西中、幸手桜高校の校章



て足疲るるものなり。これをおもえば志は高くたて、望みは大きく望みまでは半途に心倦れて、小き事をもなし肯がたきわざなるべし。』孝之には、この言葉の意味がわかるか。」
赤塚先生の問いかけに孝之は首をふった。先生はひと呼吸おいてから言った。

「道を歩いていくのに、江戸までと目標をもつと、その途中の千住で足が疲れ、越谷までと目標をもつと越谷手前の北越谷付近まで、春日部までとすると杉戸までで疲れてしまう。目標を高くもち、望みを大きくもたなければ、その途中で心がくじけ、小さい目標すら達成しづらくなってしまう、ということを言っているんだよ。」

先生の話聞いて、孝之ははっとした。豊との朝練や練習試合のことが次々とよみがえり、頭をガーンと打たれた思いがしたのだった。

翌朝、だれよりも早く来て、グラウンドで走る孝之がいた。いつも通り早くやって来た豊は、孝之の姿を見るといっしゅんびっくりしたようだったが、次のしゅん間、笑顔になった。孝之も豊の姿をみつけると、手をふりながらかけ寄っていった。豊に伝えようと思っ

● もっと知りたい「橘守部の言葉」

（『待問雑記』から）

「耕為んには、水田にまれ陸田にまれ、犁耕す時、鋤を深くいれんにしくはなし。鋤をふかくいれば立根もふかくのぶ。立根ふかく延ねば、苗の身も高く延ず。穂ての物、立根の長さにしたがいて、身も延たつものなり。」

【現代語訳】

「土地を耕すには、水田であろうが畑であろうが、鋤を深く入れる方がよい。鋤を深く入れれば、立ち根も深く伸びる。立ち根が深く伸びなければ、苗の丈も高く伸びない。すべての作物は、立ち根の長さに応じて、身の丈も伸び立つものである。」

箱根路を走る

— 柳

利幸 —

学習した日

月 日



「八区は柳利幸です。早稲田で唯一、四年連続の出走となった柳、八区は一年生で経験して以来二度目の登場です。平塚中継所で早稲田の九秒後に襷リレーをした明治大学が追いついてきますが、柳は落ち着いて並走しています。そのままのリズムで前との差をじわじわと詰めています。八区の難所である遊行寺坂にやってきました。昨年は並走しながらも途中で明治に差を開かれてしまった柳、今年は違います。明治を引き離し、そのまま一気に差をつけています。」

平成二十八年正月の箱根駅伝のテレビから流れるアナウンスである。

陸上競技と出会ってわずか五年。幸手市立西中学校卒業、早稲田大学四年の柳利幸は、無我夢中で過ごしてきた。襷をもらい襷をつなぐことだけを考えて走った箱根も今年が四度目、最後となった。昨年は区間四位、早稲田大学の記録を更新したが柳は決してそれだけで満足していなかった。チームが優勝してこそ本当の喜びがある。名門早大の復活をかけて、最後の箱根を走っているんだという思いを噛みしめて駆け抜けよう。柳の思いは高まる。

名門早稲田大学競走部で四年連続箱根を走ることができたのも、実は、柳には中学校・高校時代に学び得たものがあつたからである。

現在僕は、早稲田大学競走部に所属し四年目を迎えている。あの時、友人が僕を誘ってくれなければ、今頃は平凡な大学生活をしていたに違いない。陸上を始めたころの僕には、今のような姿を全く想像できなかった。

今でも、僕はあの日を忘れない。幼稚園のときから始めたサッカー。幸手西中学校時代には高田宮杯で埼玉県五位という成績を残すことができ、Jリーグの選手になることを夢見ていた。自分でも自信があり、周囲もそれを認めてくれていた。

右サイドバックとして豊富な運動量でクロスを磨き、自信をもって臨んだ高校サッカー。自分の夢の実現への第一歩であった。でも高校サッカーは違っていった。部員はJリーグの下部組織出身者が多く、レギュラーをとるのは単なる努力だけでカバーできるほどやさしいものではなかった。下部組織で鍛え上げられたセンス、大胆な動きや細心の技、どこをとっても勝ち目がない。とうとうレギュラー争いからも脱落。高いフィジカルとテクニックが求められる高校サッカーにはどう努力してもそのレベルについていけなかった。

大きな夢と希望は厳しい現実にくちくだかれ、ただ練習を消化しているだけの毎日を送っていた。
(なんのためのサッカーだろうか。このままの生活でいいのだろうか……)

揺れ動く気持ちは抑えられない。そんな生活に耐えられなくなり、やめることを考え始めるようになった。今までずっと続けてきたサッカーをやめてしまってもいいのだろうか。やめてしまったら今まで続けてきたことが無駄になってしまわないだろうか。しかし、このままでは……苦悩の毎日だった。

高校二年生になり、意を決してサッカー部を退部した。約一カ月、自分は何をすべきかを考え、悩んだ。家に帰ってもふさぎ込んでいた。心配した母がいろいろ声をかけてくれたが、こたえることができなかった。退部したものの、新たな目標が見つからない。

そんな時だった。陸上部の友人が

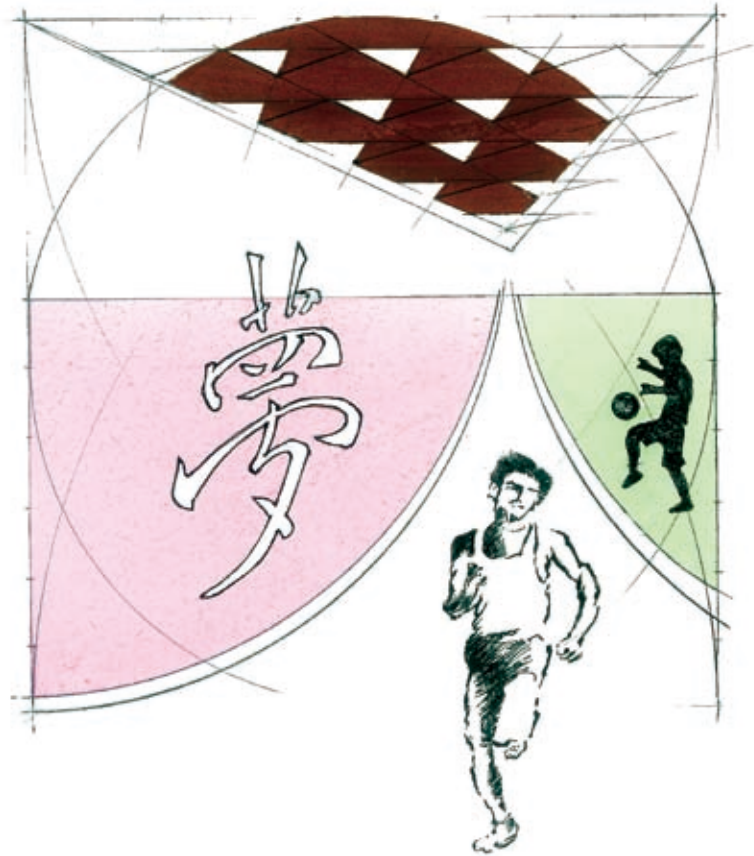
「陸上をやらないか。サッカー部の君を見ていたら、陸上でも十分やれるだけのスピードと持久力があると思うんだ。陸上という新しい世界にチャレンジしてみろよ。」
と誘ってくれたのだ。

ずっと続けてきたサッカーをやめた僕が、誘われたからといってすぐに陸上部に入ってもいいのだろうか。様々な思いが交錯した。

そんな時、僕の頭によぎったものがあった。サッカーの技術では劣っても走ることなら負けない自信がある。

『幸手市小中学校ロードレース大会区間最高記録八分十三秒(平成二十年度)』





今でもこの記録が残っている。このまま何もせずには高校生活を送っていたら、もっと自分が駄目になるのではないか。陸上という新たな道で一からやり直してみよう。

悩んだ末、二年生の三学期から陸上部に入部することを決意した。陸上への挑戦だ。幸いにも陸上部の人たちは僕を温かく迎え入れてくれた。三年生で正式に入部。高校総体県予選三千メートル障害で優勝することができた。北関東大会ではけがを負いながらも七位になった。高校駅伝県大会では一区を走り二位となり、全国都道府県対抗駅伝の埼玉県代表に選ばれた。

(自分にこんな能力があったんだ。)

走ることに夢中になった。サッカーをやっているときは、がむしゃらに走っ

ていたが、今はペース配分を考えるのがおもしろい。自分が頑張れば自分に返ってくるし、よいタイムを出したときの達成感も心地よい。

まだ、僕は満足しない。もっと上のレベルで走れるように、一つ一つの試合を本気で、トップをめざして走ることができるよう努力していく。過去はどうあがいても変えられないのだから。自力でなんとも変えられる未来を見据えて一歩一歩前進していきたい。

四度箱根を走り、四度目は団体四位、個人区間三位に輝く柳利幸、いろいろな思いを胸に箱根を走った。その確かな足取りで。

● 自分の中にある「よいところ」を見つめ、どのように伸ばしていきたいか書いてみよう。

幸手・ブランド米

日本一美味な米として幕府に上納され「最高級米」として評価されたり、江戸の食通から「殿様米」とも呼ばれたり、明治に入ってから宮内省（現在の宮内庁）指定の御納米として扱われた米、それが幸手産の白目米です。今でも、幸手のお米は、年により皇室献上されています。白目米は、栽培が難しく、背丈が高く倒れやすい、収穫量が多くないなどの特性により昭和初期には生産量が減少し、さらに戦時中の法律により栽培を禁止され、以後半世紀以上にわたって一般に流通することの無い「幻の米」となっていました。ところが、白目米の栽培は幸手市の町おこしの一環として、私の両親がメインにその活動をし一九九六年に復活し再開されました。

当時、私自身はまだ流通業界で仕事をしていました。私自身が次男でもあり、農業の跡継ぎは長男という固定観念がありました。

幸手市を離れて会社員をしていて、転勤も数回し、その頃には、両親が働いている姿を少し見かけては、家の農業はこの後どうなるのだろうかと気にしていました。ちょうどそのころ子どもの就学のことも重なり、十二年近く勤務した会社を退職し、思い切って実家にもどり、農家への転職を決意しました。

私は大学では経済学を専攻していたので、農業をはじめたものの、最初から、農業の知識や経験は全くないというハンディーキヤップがありました。最初の三年は毎年、自分の背を超える本を乱読していました。農業を始めて三年目には、ドイツとフランスの海外視察研修にも参加していました。世界でトップクラスの農業大国ですから、良い刺激を受け始めました。また、その頃から、田植えをしない、乾田直播かんてんちよくばという最先端の稲作を農水省の指導のもと始めました。

自分自身、型破りな性格でしたが、型を破る前に、型が無かったから、基本を中心にしっかりと学びました。土作りもそうですが、一朝一夕ではできません。夢を見続ける事も大事ですが、今日一日を精一杯に頑張る事を続けていく事だけが、



学習した日

月 日



未来の自分を作っていきます。

流通業界での経験から、農産物も販売が大切な事を最初から考えていました。販売士という資格を取得していたので、経営面では普通の農業者よりも、広い視野で考えられる立場にいました。お米アドバイザー、ごはんソムリエ、食品衛生責任者などの資格を取得しました。ハンディーキャップが、バイタリティーの源になりました。そして、今は両親と私がメインではありますが、幸手市で最初の、農業での株式会社を設立いたしました。

まずは、埼玉県でトップになろうと思いい、埼玉県のコンクールに参加しました。そこで、三年連続入賞という快挙を得て、ますます仕事が面白くなってきました。同時に、日本各地の大きな全国大会に出場しました。全く振るわない時期がありましたが、それでもめげずに挑戦し続けました。その頃から全国各地を勉強しに駆け回り始め、沢山の先輩の農業経営者の知り合いを作りました。

米作りが少し分かってきた矢先の出来事です。二〇一〇年は、五十年に一度という猛暑の年でした。稲はあまりの暑さに、透明であるはずのお米が真っ白くなり、割れやすい状態の品質低下になり、販売価格の低下から、経営にも影響が出ました。両親も初めての経験というほどの痛手を受けました。つらい経験でした。そして、暑さに強い品種を必死で探し、全国各地の品種を栽培し始めました。美味しくて品質の良い品種ながら、まだ埼玉県では誰も作っていない品種などにもチャレンジしました。しかし、翌二〇一一年三月には、東日本大震災が起こり、計画停電があったり、放射能の問題があったりしました。一部のお客様は購入しなくなってしまう。*風評被害も受けました。まさに、「泣きっ面に蜂」状態でした。(やっぱり、自分に農家はむりなのだろうか。)と真剣に考えるようになりました。

ところが、その頃から、栽培を始めた品種が、次々にコンクールで入賞し始めました。またもや、思いもよらない幸運に恵まれました。最高で全国二位になりました。稲が頑張ってくれています。日本一になるのは、もう少しの知識と努力と、幸運が必要です。運も実力のうちですが、偶然の成功は望んではいけない事です。一生懸命やって駄目でも、知恵と経験は身につくもので、働く上でこれは最も大事な事です。



そんな矢先、二〇一五年、『関東東北豪雨』の被害にあいました。一難去ってまた一難です。稲刈りの収穫の時期、それまで降り続いた雨と、止まない豪雨で、水田はかなり浸水し、収穫できないかもと不安になりました。全国各地の知り合いから、心配と励ましの連絡をいただきました。どうにか、大きな被害はなく、収穫できたときには、本当にほっとしました。

自然を愛し、自然に翻弄^{ほんろう}され、それでも自然の恩恵の中、生き抜く力が大事です。日の出とともに起床し、日の暮れるまでには仕事を終わりにするように心がけているのは、全て稲を中心に考える事が大事だし、外での仕事を中心だからです。農業の中でも、稲作は機械化が最も進んでいます。ハイテクのITを駆使したり、インターネットを利用して、天気の情報や常にとらえての作業を計画したりしています。週間の天候を考慮し、作業の優先順位を常に組み立てておしていく事が、大規模を管理していく秘訣^{ひけつ}です。

どんな仕事も、実はやればやるほど、働けば働くほど面白くなる魅力のあるものです。知れば知るほど難しさを知り、それでこそ乗り越えられるだけの価値があります。それが、仕事です。

これからも、地域の担い手として少しでも、世の中のお役に立ち続けていきたいと思っと思っています。それを、絶やすことなく、誰かしらが受け継いでくれたらよいなど、こっさり思っっています。

*一朝一夕…わずかの月日のこと。

*風評被害…根拠のないうわさのために受ける被害のこと。

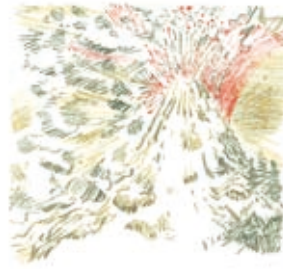
*泣きつ面に蜂…悪いことのおかげにまた悪いことが重なること。

●働くということや地域や社会のために貢献していきたいことを書いてみよう。

石に刻まれた心

学習した日

月 日



ゴーゴーゴー、ドカーン。

今から二百年ほど前の天明三年（一七八三年）六月二十八日、浅間山が大爆発をおこした。山の中から赤々と流れ出た溶岩が付近の村々を埋め尽くし、大勢の人たちが死んだ。

この幸手を流れる利根川には、溶岩とともに流されてきた土砂や木々に混じって、おびただしい数の人や馬の死骸が浮いていた。十日あまりも降り続いた火山灰が関東一円をおおい、幸手の村々でも農作物は四、五寸（十二〜十五センチメートル）もの灰に埋もれ、折からの冷害による飢饉ききんに追い打ちをかけるようにしておこったこのできごとで、今年もまったく収穫が見込めなくなってしまった。

「なんていうことだ。おれたちがいくら汗水流して働いても、これじゃ年貢さえ納められねえ。」

「おれたちが食うものなんぞ、もうありやしねえ。」

村人たちの顔からは、もはや生きる力も希望も消えはて、だれを恨むこともできずにただ天を見上げ、足元に降り積もった灰に涙を落とすばかりであった。

「このままでは、村人たちはどうやって生きていくのだろうか……。」

降り積もった灰を手にながら、文左衛門ぶんざえもんは心をいためた。

幸手は日光街道の宿場町として栄え、街道沿いには*本陣ほんじんを務める知久家ちくけをはじめ、大きな構えの商家が軒を並べていた。

「東北の村などは、それはもうひどいものだ。日に日に飢えて死んでいく者が増えていそうだ。」

「なにしろ草木の根まで食い尽くしたというから恐ろしい話だ。」

旅人たちのうわさ話を思い浮かべながら、文左衛門は手にした灰をかたくにぎりしめた。灰が降り積もった大地からは、その年の秋になっても作物の収穫はなかった。ひもじい思いで年を越し、春を迎えた村人たちは、いよいよ食べるものがなくなり飢えに苦しんだ。

ある日、文左衛門は、豪商の*長島屋ながしまやから相談を持ちかけられた。





「このままでは、村のものが飢えて死んでしまう。なんとかできないものだろうか。文左衛門さん。」
「こう天災や飢饉が続いては、どうにもなるものではなからう。なにしろ飢えているのは一人や二人ではないのだからね。それに、この飢饉もいつまで続くかわからない。」

「それはそうだが……。」

浮かぬ顔の長島屋を見送りながら、なんとなくわりきれない気持ちの文左衛門は、
（どうしたらよいのだろうか。この飢饉が早く過ぎ去ることを祈るしかないのだろうか。）
そう自分に問いかけていた。

日に日に飢えて死んでいく村人のうわさが、あちこちで聞かれるようになった。食べ物を求めて、
ふらふらと町の近くまで現れるやせ細った村人の姿も見られるようになった。

そんなある日、文左衛門は、用事があって町はずれまで出かけた。裏町にある寺の横を通り過ぎようとした文左衛門は、境内の人だかりに気づき、足を止めた。ふと見ると、お堂の方では住職が、ありがたそうに手をさし出す村人たちに小さなイモのかけらを一人ずつ手わたしていた。

（あんなものでも腹の足しになるのだろうか。）

そう思いながらも、文左衛門はしばらくの間、その様子をじっとながめていた。が、住職がちらっとこちらを見たような気がし、
急いでその場を通りすぎた。

用を済ませた帰り道、先ほどの寺の近くにさしかかると、大きな銀杏いちょうの木の根元に何やらうずくまった人影らしきものが見えた。だんだん近づいていくと、破れた着物からやせおとろえた手足を出した男が頭を垂れて銀杏の木にもたれかかり、うずくまっているのだった。

（何とかわいそうに、こんなところで死んでいるとは。）

文左衛門は、目を伏せて早足でそこを通り過ぎようとした。その瞬間、ぞうりの鼻緒がぶつと切れた。文左衛門が途方にくれていると、死んでいると思った男がぬくくと起きだして、こちらにふらふら近づいていく。恐ろしさのあまり、文左衛門のからだは凍りついたように動けなかった。

どれくらい時間がたったのであろう。文左衛門が気がつくつと、足元にすげかえたぞうりがあり、よろよろと歩く男の後ろ姿が遠くに小さく見えた。

二、三日眠れぬ日が続いた。箸を口に運びながらも食事のどを通らなかった。



文左衛門の足は、長島屋に向かっていた。

「長島屋さん、このあいだの話だが……。」

「いったい急にどうしたっていうんだい。」

「この幸手は宿場町として潤っている。どうだろう、町の商人たちと相談してみては。」

「不作続きで米の値段もこんなに上がって生活も苦しくなり、うまくいくかどうか。なにしろたび重なる飢饉で苦しんでいるのは、農民ばかりではないのだからね。」

「だが、こうしているうちにも……。どこまでできるかわからないが、長島屋さん、一緒にやってくるかい。」

しばらく考えていた長島屋は、にっこりうなずいた。

その翌日、すぐにおもだった町の商人たちを呼び集め、

相談を始めた。文左衛門の熱意と真剣なまなざしがみなの心を動かした。お金や穀物を持ち寄って、寺の境内に粥所かゆしよを設け、大きな釜でつくった粥を、飢えに苦しんでいる人に分け与えることにした。

境内には、その日食べるものもない人たちが後から後から何百人も集まってきた。やせ細ったからだを支え合うかのように歩いてくる者、やっとの思いで境内までたどりつき、力尽きて倒れこむ者、みなありがたそうに粥をすすった。文左衛門は、粥の入ったおわんを一人ずつに手わたしては、おいしそうに粥をすすする人たちの顔をながめがらほえんだ。

この救済は、*何百両というお金を使って妻が実る夏までの、実に七十日もの間続けられ、多くの人たちの命を救った。

幸手市の正福寺しょうふくじの境内にある「義賑窮餓之碑ぎしんきゅうがのひ」には、文左衛門のほか、救済にあたった二十一人の名が刻まれている。（埼玉県道徳教育用郷土資料集（中学校）から）

*本陣……宿場で大名が泊まった公認の旅館のこと。

*長島屋……幸手宿にあった日光街道随一の呉服商。

*両……当時の通貨単位。江戸時代中期頃で一両が四く六万円程度。



義賑窮餓之碑（正福寺）

● 知久文左衛門の生き方について、感じたことや考えたことを書いてみよう。

道徳の窓②

郷土の旧跡・文化財・芸能



平将門の首塚 (神明内)

平将門は、天慶の乱(九四〇年)で下野の土豪藤原秀郷と平貞盛連合軍に敗れました。将門の首を愛馬がこの地まで運んできたと言われ、浄誓寺の境内には、高さ三メートル程の塚に五輪塔が建てられています。

マリア地蔵 (権現堂)

権現堂集落農業センターの敷地内に、文政三年(一八二〇)に立てられた子胎延命地蔵大菩薩は、赤ん坊を右手に抱き、「イメス智言」の文字や十字架、仮託信仰の象徴である魚と蛇が刻まれています。そのため、隠れキリシタンの信仰対象であったと考えられています。

広重の幸手宿の錦絵 (中一丁目)

錦絵『東海道五十三次』で有名な江戸時代末期の浮世絵師、歌川広重。広重は『日光道中』という作品に日光道中六番目の宿として栄えた幸手の宿を、当時ののどかな旅人の姿とともに描いています。

神宮寺 (南二丁目)

源頼朝が、奥州征伐の際、上高野で鷹狩りをし、薬師如来に戦勝祈願をするため開基しました。鷹尾山誓願院神宮寺と名付けられ、この辺一帯の地名が神宮寺村と呼ばれていました。

聖福寺 (北二丁目)

菩提山東臈院聖福寺、通称「しんてら」。八代将軍徳川吉宗が日光社参の際、休憩所として聖福寺に立ち寄った時の昼の弁当の献立表が残っています。

権現堂堤修復絵馬 (北三丁目)

熊野神社は、江戸時代に熊野・若宮・白山の三つの権現の合社で、権現堂の地名の由来にもなっています。この付近は、江戸時代から大正時代にかけて権現堂河岸の船着場として栄え、神社には、船主や、船頭、江戸の商人等からの奉納品が数多く保存されました。明治二十八年に奉納された鈴木国信の作の絵馬は、かつての土木技術や村の様子を知る貴重な資料となっています。

大杉ばやし (高須賀)

別名「あんばばやし」は、毎年七月の第一日曜日、高須賀の大杉神社の夏祭りで行われるお囃子で、繁栄や悪疫退散、害虫駆除、風水害からの無事などを祈願します。

やさら獅子舞 (千塚・松石)

天下太平や家内安全、五穀豊穡などを祈願するもので、雄・雌・中という三頭の獅子が花や弓などの舞い方で家々を回るのが千塚、行司を先頭にひよつとこや天狗も加わって、家々を回るのが松石のやさらです。七月十五日に近い日曜日に行われます。

八坂の夏祭り (中央通り)

三百年近い歴史と伝統を誇り、幸手の夏を熱気で包み込むお祭りです。毎年七月の第三週日曜日の夕方には、「花山」と呼ばれる豪壮な山車の曳回しが行われ、駅前を駆け上がる勇壮な姿には、毎年大きな拍手と歓声が送られます。



協力者

【資料・写真提供】

新井敏記『片山豊 黎明』（角川書店）
NPO法人幸手権現堂桜堤保存会
幸手和太鼓保存会
画家 茅兵
埼玉県立幸手桜高等学校
早稲田大学競走部
株式会社中山農場
埼玉県教育委員会
幸手市役所建設経済部商工観光課
幸手市教育委員会社会教育課

編集委員

【監修】

文教大学講師（関東甲信越中学校道徳教育研究会顧問） 五十嵐由和
文教大学講師（元 幸手小学校校長） 小山 茂男

【表紙・挿絵】

プロトデザインアトリエ 中村 勝彦

【編集】

| | | | |
|--------|---------|----|-------|
| 編集委員長 | さかえ小学校 | 校長 | 藤崎 顕孝 |
| 編集副委員長 | 東中学校 | 教頭 | 阿部泰次郎 |
| 編集委員 | 幸手小学校 | 教諭 | 田中三三子 |
| | 権現堂川小学校 | 教諭 | 田口 園美 |
| | 上高野小学校 | 教諭 | 石田 真澄 |
| | 吉田小学校 | 教諭 | 三ノ輪真人 |
| | 八代小学校 | 教諭 | 齊藤 典子 |
| | 長倉小学校 | 教諭 | 菊地 静江 |
| | さかえ小学校 | 教諭 | 大沼 恵 |
| | さくら小学校 | 教諭 | 峯岸明日香 |
| | 幸手中中学校 | 教諭 | 関谷 典子 |
| | 西中学校 | 教諭 | 田中 智子 |

【事務局】

なお、幸手市教育委員会では、次の者が編集を担当した。
幸手市教育委員会 学校教育課長 森 祥一
幸手市教育委員会 学校教育課 堀越 成夫
安東由美子
坂本 信之
山本 直人



ささら獅子舞（市指定無形民俗文化財）

幸手市郷土資料「道徳のまちさって」

平成28年3月31日発行

発行者 幸手市教育委員会

〒340-0192 幸手市東4-6-8

TEL 0480-43-1111

FAX 0480-43-3188

E-mail gakk@city.satte.lg.jp

印刷所 中央プリント株式会社



| | | |
|------------|----------------------|--------------------|
| <p>学校名</p> | <p>幸手市立 幸手市立</p> | <p>小学校 中学校</p> |
| <p>氏名</p> | <p></p> | |